不定期刊行　　第 365 号　2010.08.24

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者　大西　浩
池田工業高等学校

崑崙山脈「阿克沙衣峰」（6770m未踏）偵察行　はじめに

「来年の登山を成功させるため、何でも見て来よう。」・・・７月２０日付のかわらばん３６３号でそう書いた。そしてその決意には偽りはなかった。しかし、成果をあげることもできないまま、失意のうちに帰ってくることになろうとは・・・。自然の猛威の前では、人間は何もできない。「偵察」を終えて文字通り「無事」に帰ってきた。しかし、・・・**何も得る事無いという意味での「無事」では偵察に行った意味はない**・・・徒労の偵察だった。もちろん現地でなければ得られない貴重な情報も手にはできたが、それとてなんの慰みにもならない。とにかく想定外の事態であった。結局所期の目的であった山の偵察はおろか、写真すら撮ってくることができなかったのだから・・・。

これまで、この山域にはいった登山隊が洪水による道路の決壊で現地に入れなかったという報告は目にしたことはなかった。しかし、そんなことが現実には起こるのである。今年新疆地区では２０００年以来の大雨が降り、各地で洪水が発生していた。７月下旬にパキスタンで洪水が発生し、１６００人を越える犠牲者が出たというニュースを見た方は多いと思う。我々の目指す阿克沙衣峰は、インド・パキスタン・中国（新疆）の国境地帯にあたり、「山」ではこの洪水を起こした雨と同じ雨が降り続いたものと思われる。我々が新蔵公路のカラコルムベースとの分岐点「マザー」に着くと、その先の道路が通行止めになった関係で数十台のトラックが停まっていた。なんでも我々の入山する３日前に土砂崩れで道が崩壊し、トラックも埋まるなどの事態が生じたとのこと。人が住んでいない地域でもあり、また新疆でも他地区（庫車）などでの洪水が深刻だったこともあり、こちらの様子は報道はされていないが・・・。我々のベースはそこからさらに２２０ｋｍ以上先である。翌日、行けるところまで行こうということで進んだが、５０㎞弱進んだところで全く進めなくなってしまった。結局、残り１７０ｋｍ歩くもままならず、開通の目処も全く立たないと言う状況の中、引き返さざるを得なかった。西域南道からなんとか遠望、山座同定はできたものの、山の姿を間近で見ることはできなかった。西域南道でも、２０００年（セリッククラムムスターグ遠征時）と同じような洪水の爪痕が随所に見られた。あのときは、１００年に一度の洪水といわれたがその規模の洪水が、１０年に一度のペースで起こったのだった。それにしても２０００年、２０１０年と我ら「信高山岳会」との間になんともいえない因縁も感じる。以下、その偵察にならなかった偵察行を報告する。

崑崙山脈「阿克沙衣峰」（6770m未踏）偵察行　その1

飛行機はお客の積み残しはしない

７月２５日　６時３０分、我が家まで迎えに来てくれた松田さんの車で中部国際空港に出発。７時３０分飯島町で久根さんをピックアップ。１０時空港に到着。チェックインはスムーズに終わり、１１時前には松田さんと別れ、いよいよ出発を待つばかりとなった。久根さんはハンバーガー、小生はカレーと、しばらくはお預けとなる日本食を食

べる。今回はヌルさんを通じて格安のチケットを手にしていたが、大連経由である。約２時間のフライトで１３時２５分（以下現地時間）には中国に降り立った。乗継までおよそ５時間あったが、市内へ出る時間はないだろうと判断し、空港の中で時間つぶし。大連はやはり海辺の町だけあって、お土産にも海産物が目立つ。１７時、ウルムチ行きの飛行機ＣＺ６９５４便に乗るべく、チェックインを済ませた。待合室で待っているとフライト時刻が４０分遅れるとのインフォーメーション。そのあと暫くして搭乗口が７番ゲートから１７番ゲートに変更になったことが示された。我々も移動をしてずっとその前で待っていた。

ところがいつまでたっても１７番ゲートが開く気配はない。１８時４０分、気づくといつの間にかさっき一緒にこちらに移動してきた一団の姿が見当たらず、我々の周りにはあまり人がいない。「ん？何かおかしい。」と思い、１７番カウンターの前にいた服務員に搭乗券を示すと、血相を変えた彼女は大急ぎでこちらへ来いという。久根さんを促して彼女の前に行くと、１６番ゲートを示してすぐにあのバスへ乗れという。なんと、ゲートが再変更されていたのだった。そして服務員は我々を探していたのだ。迂闊にもそれに気づかずにいた我々。日本なら「最終搭乗案内」で呼び出されるところだが、そんな風もなかった（実は気づかなかっただけかもしれないが・・・）。他の客はもういない。二人だけを乗せたシャトルバスは、大慌てで飛行機に向かった。機内に乗り込むと「いまや遅し」と待ちくたびれた他の客の白い目線。「あやうく乗り過ごすところだったね」という久根さんに、これまでにも何度もこんな経験のある前科者の僕は「飛行機はチェックインしたお客の積み残しはしないから」と強がっては見たものの、のっけからひやりとした瞬間ではあった。

結局１時間遅れで離陸した機は、途中石家庄に立ち寄った後、０時１０分ウルムチ着。空港のビルが新しくなっていたが、迎えに来たヌルさんに尋ねると、このターミナルビルは今年５月に南方航空専用にできた新しいものだそうで、外に出てみると昔の懐かしいターミナルビルもそのまま残っていた。ヌルさんとは１年２ヶ月ぶりの対面である。彼とともに今回連絡官として同行してくれる漢族の周建軍さんも一緒である。二人とも流暢な日本語を話すので、意思疎通には苦労しない。ヌルさんの愛車ワーゲンサンタナで市内中心部へと向かう。第一印象はかつてほど石炭の煙くさくないこと、ウイグル語の看板に変わり漢語の看板ばかりが目に付くこと、の二つであった。１時２０分、イスラム式のトゥマリスホテルに到着。「安着祝いに軽くシシカバブでもどうですか？」というヌルさんの申し出に嫌も応もない。新疆のローカルタイムでは１１時２０分、近くの屋台に出るとまだまだ宵の口であり、町は活気がある。しかし、大バザール前のこの屋台街一帯が、実は昨年の騒乱の勃発地でもあり、現に多くの人が亡くなった現場でもあると聞くと、内心穏やかではいられない。今はその跡形も無く漢族もウイグル族も無く、平穏であるのだが・・・。しかしそれはそれとして９年ぶりのシシカバブの味は一気に新疆気分を盛り上げテンションを上げる。宗教上の理由から飲まないヌルさんと、周さんも含めた我々３人のこれからずっと続く夜の屋台の日々の幕開けであった。

編集子のひとりごと

中国から帰って早半月、大陸の乾いた暑さとはちがうじめじめとした日本の猛暑は、いつまで続くのだろうか？しばらく新疆の旅にお付き合い下さい。（大西　記）